

横浜植物会ホームページ http://www011.upp.so-net.ne.jp/yoko_syoku/index.html

箱根仙石原のカナダコウガイゼキショウ

会長 勝山 輝男

今年は新型コロナ禍により例会がことごとく中止になってしまいました。緊急事態宣言が解除され、現地集合で歩きやすい植物園内なので、ある程度の三密は避けられると判断され、7月22日の例会「箱根湿生花園」が実施されました。そのときの報告がHPに掲載されています (http://www011.upp.so-net.ne.jp/yoko_syoku/action/20200722shisseikaen.pdf)。当日観察した主な植物の一覧に、仙石原湿原復元実験区で見たタチコウガイゼキショウ (イグサ科) が出ています。当日現地では「タチコウガイゼキショウに似ているのだけれども変な植物だ・・・とりあえずタチコウガイゼキショウ」と紹介しました。以前 (2011年頃) から気になっていた植物なので、調べ直したところカナダコウガイゼキショウ *Juncus canadensis* J.Gay ex Laharpe と判明しました。この場を借りて訂正したいと思います。

カナダコウガイゼキショウは北アメリカ中部から東部原産の帰化植物で、日本では神奈川県 (神奈川県植物誌 2018) で最初に記録され、最近、北海道への帰化が報告されています (新田, 2020. 北方山草 (37): 75-78)。神奈川県では 2015 年に山北町玄倉の薬草園の跡地 (KPM-NA0282503)、2016 年に箱根仙石原 (KPM-NA0289150) で採集され、神奈川県植物誌でイグサ科を担当された関口さんにより、*J. canadensis* と同定されました。そのときに、ラベルに“*J. canadensis* det. T.Katsuyama 大阪摂南大学薬用植物園で水生植物の鉢に発生したもの”と書かれた標本 (KPM-NA0136929, 0136930) が県博にあることを知らされました。すっかり忘れていましたが、2008年頃に同定を依頼され、同定結果のみを答え、特に発表もしなかったことを思い出しました。

コウガイゼキショウの類は葉が多管質のもの (左右から扁平でアヤメのような葉) と、単管質のもの (管状でタケの茎のような隔壁がある) に分けられます。多管質のものにはコウガイゼキショウ、ヒロハコウガイゼキショウ、ハナビゼキショウなどがあ

り、単管質のものにはアオコウガイゼキショウ、ハリコウガイゼキショウ、タチコウガイゼキショウなどがあります。カナダコウガイゼキショウは単管質の葉を持ち、茎が直立し、頭状花序の花数が多く、さく果は鈍頭で先端が凸出するので、一見するとタチコウガイゼキショウに似ています。しかし、カナダコウガイゼキショウは雄しべが 3 本 (タチコウガイゼキショウは 6 本)、種子には両端に図のような白色の細長い付属体があることで明確に区別できます。

湿原復元実験区の問題の植物は、2011 年に標本 (KPM-NA0200466) を作製しましたが、細部の観察を怠り、“タチコウガイゼキショウ?”として標本を収めました。“?”つきとはいえ、タチコウガイゼキショウとしてデータベースに登録されてしまい、『神奈川県植物誌 2018』のタチコウガイゼキショウの分布図にはこの標本による分布点が打たれてしまいました。タチコウガイゼキショウは神奈川県では相模川の河川敷に多く、箱根には分布していません。

カナダコウガイゼキショウは仙石原湿原復元実験区の南側の木道沿いにかかなりの個体数が生育していますが、2011 年当時と生育範囲や個体数は大きく変化していません。2016 年に仙石原で採集された標本 (KPM-NA0289150) もおそらく実験区で採られたものと思います。外来種なので実験区の外に出ないうちに駆除する必要があります。



[スケールは 0.1 mm]

図. カナダコウガイゼキショウ 左: 花序 右: 種子